

束の間

うめいている雷鳴の目

銃殺

いのちにあいた五つの穴が

乾くまもなく 黒ずみ

印字されたのを知る

それは漫画ページのかたすみ

数行のニュース

その名はやがて

千切れ 遠のいてしまっだらう

けれどひとときかれを流れた午後

かえることはできない

大通りの名をかえるようには

はおっていた山河を

ひとり ふるえる大気のはしにかけて

息はひいていく その ひえた路面を

ぼくは知っている

ここにぼくはかんたんにいて

愛は肉体を着ていた

ぼくは手紙を書いてまわる

地下の通路という通路に

暗い秘密にたえられないから

知らなかった

死のほりではじまる

今日というとほりもない時間は

かなしいほどかがやいている

椅子

掃除機が鳴っている  
礼拝堂のなか  
つるつるした木の背もたれ、お尻のところ  
どの椅子も  
そこだけニスが剥けている  
きつと月曜は毎週そうしてきたんだ  
Tシャツごしに  
せなかの脂肪をゆらすかれは  
こちらを気にとめない  
すすり泣きよりも乱暴なひきずるしかた  
そっけない、でもやっぱり  
血がかよってる  
靴のなかで指がぎゅっとまるまる  
すみきった  
ひとときわふかい断層にみとれた  
だけど  
ざらつくおとのほか  
なにかきこえていたか

ケイ  
なあ知ってるか、祈るということ  
スターバックスの  
なみなみとつがれた紙コップ  
あんなふうに、ひとは持ちあるく  
こばさぬように首のうしろをかたくして  
別れの記憶  
うかがい知れぬこと  
舌にのこる髪の毛のような  
一本の針金  
いつだったか頬のうらにあたるその一本を  
はきだそうとして  
落ち葉のいいにおいがした

枝がふっと折れるようにちからがぬけて  
この肺もやぶれること  
これは知ってる  
だから輪郭を  
はつきりさせてしゃべりたい  
けだるく  
視線のとどかない午前中  
ひとりでかれがきれいにしてる  
まっすぐに床にならべられている、古い椅子  
だれかがここに腰かけて  
木の温度でたちさった

あたりにこぼれた靴底の泥  
一週間のホコリ  
こなごなの枯れ葉  
しがみついた虫、ぬけおちた髪の毛も  
そのたしかな、ひとつひとつの呼吸がくらやみく  
みざるいするほど  
あつというまに吸いこまれていく  
離陸する  
旅客機のような振動につつまれて  
ドラム型の掃除機と  
胡桃がひとつころがつている  
だれかのおと  
鳴りやまないおとを  
おそれもなくきいたということなのか

差出人は不明

「南極からうまれた巨大氷山  
一二〇マイルにわたる亀裂」

読んだ？

ラーセンC棚氷だって。

氷いくつ？

製氷皿に力をこめながらきみは言う。

新生児のころ

ひとはまだ昼夜の区別がない。

うまれてやっと漂流がはじまる

それ以前は

木っ端とかわりない。

木っ端とかわりない、ただ

一兆トンの氷山とだってかわりない

風はその頬をうたない

ひかりはまぶたを透けない

まるでポストにおちたみたいに。

差出人は不明

たしかに届いた

その封筒には

膨大なページが折りこまれているけれど

そこにはなにも書かれていない。

東京、2020

うん なにかがある なにか  
とても あやふやで それは  
ベーグルが 紙袋につくる 脂しみ それから  
すりむいた手の甲が記す もみくちやのデモと  
警棒の 隙間にもれたす光  
書き留めた これらの硬い筆跡 それが  
湿ったスウェードの スニーカーのなかで 水分をすい  
しずかにしみわたって いくのを きいているのか  
沈みすぎるソファで きみは  
入れ違いばかりのレコードに こうさんして  
やわらかな紙をつまみあげ 丁寧にひろげ わからなさに濡れた  
痕跡を もり何十分も みつめている  
鍵をたすぎがけして 漕ぎ出した 刹那  
にわかにあつと激しくなった 雨脚の音が  
とろとろ とぎれたのか  
ようやく顔をあげれば 雨後へ動く雲がみえ  
当惑する東京がみえ 怒りの反響しない しずまりかえった  
大いなるこの死場所 みんな おーい  
傘を鳴らそう おーい 混沌を  
火にかけよう コップから  
冷えきったコーヒーを 一口ぶくみ このからだ  
いつしか 鼓動が止まり 細胞が死んで  
宇宙がしみだしてくる  
消えるのでない きみはおもう  
ところで 意味のかすれた この混沌を  
いったいどこに仕舞えば いいだろう  
そんな 難解なことは おいておいて ただくんでこりんな  
わからないが たしかにここにある  
かわきはじめた紙の起伏 皺がたつ  
ことさら美しくもない 一枚きりの水仕事  
老いていく なんでもない物体 たましいという一語  
この宇宙大のわからなさ どうしようか

オールの雲

わかった  
二度と拭えない  
乾かない 付着した泥  
風がふいている  
がらくたのからだ  
影のふきとぶ夏のスキー場 静止するリフトが  
はだけた緑の胸底にひろがって  
ぼくは転がっていく からっぽの  
虫かごみたいな忘れ物になって  
場違いなまま  
間延びして、暇で、ひとり草をいんでいるまに  
みるみるススキが透け  
父さんのあのしずかな姿勢も  
書き足す雪で、すこしずつ膨らみ  
重たい雪男みたいになって やがて  
また見えなくなって  
すこしの毛羽立ち、紙を  
透かしてみても、そうか、もう文字もいらぬな  
どこにいても どこまできても  
この世の果てだ ただ、ほんとうに  
かたときぼくはここにいたのか  
言葉が枕になって いつしかぼくは駅舎に眠っている  
からだにある空の虫かごから  
捕まえたさいごのイメージを  
逃がすとしたら ジャア しつもん  
なにに見えるかな  
ひらがえる馬 光る一頭が 昼も夜も  
足早だったひとりの友人を乗せて  
幾度となく まぶたのなかの地平線へ  
前傾姿勢で去っていく  
足早で ズボンに泥が跳ねるように  
瞳孔には泥がこびりついている  
けむりになっていくたくさんの知らないからだを  
風がはこんでいく

まばたき、痛み 風が  
胸をふきぬけて、扉が閉まらない  
拭えない泥の母語  
不思議なんだ 脈動のなか 黙っていても  
だれかの声がしてくる こんな意味のないことを  
ほんとうに宛てもなく  
口にすることができる  
生まれたことに、息はいま驚いているよらた

すがた

あらわれると同時に消えかかる  
ことばとか息みただ

葉がおおきくゆれて  
ふるえているのはキツネの耳  
するどく動く耳が  
字幕のように  
キツネでいることを知らせている

ぼくはみたない  
ぶらさがるトマトにみたない  
ツヤツヤのひかりにみたない  
つばむ鳥にみたない  
やわらかに粘るこのクモの糸にさえも

あらゆるものが  
みたないなにかであるということ

岩に根をしみこませる  
からからのトマトとその赤い実は  
気が遠くなるほど  
せかいそのもの

みたないままなおみちあふれたひとつぶ  
やさしく拭いて  
そりつと歯を当てる すこい

酸っぱい



音楽

音は通らないけど  
なぜかよく聞こえる  
おっかなびっくり、かたわらを  
通過する彗星  
知らせようとする  
口の動きはしずか  
暮らしを固定していた十二の数字も  
長針も短針も  
どこかへ飛び去ってしまって  
ゆるやかに頭上を回っている足さきのむこう  
色とりどりの球体が  
大小さかさまになって  
なんて、想像にはいつも限りがあるけど  
ともかくどこにいるんだい  
死にさらわれたひとを思うと  
とおいどこかにさらわれそうな気持ちも  
いまはなくて  
はじまりの森はずれに  
飛来した生命の一針が  
あかるいオオハシのクチバシになって  
指しているほうへあるいていく  
ざわめいている  
地上のこのおおきな偶然のほうへ  
そこからは  
音は通らないけど  
この世でぼんやり聞いてた音が  
なぜかよく聞こえる

あるからだ

あけわたすしせいで

全身をさしだされ

そのかおからひかりはひき おちくほみ

くぐらせた くるぶしは 二の腕 手首は

ぼらばらに はずし

目の前でくずれおちて

(これは 無刀という作品 ぼくのからだ

ここにあったものは えいえんにおこった)

からだを折りまげて どうやら

ズボンから あらわれないつまききを

いつまでもさがして

忘れのほうに 袖をとおし

だれもしらない小さな時間に

一つ二つと 胸のボタンをとめて

息はふきとり

どうしてかタンブラーだけ

わからない まるで手わたされたように たしかに

とりおとし かたい音をたて

ひえかたまった地表へ 耳をおいて

ことばをおいて

このほしが 大気におおわれていくまでの

どれほどか ながい

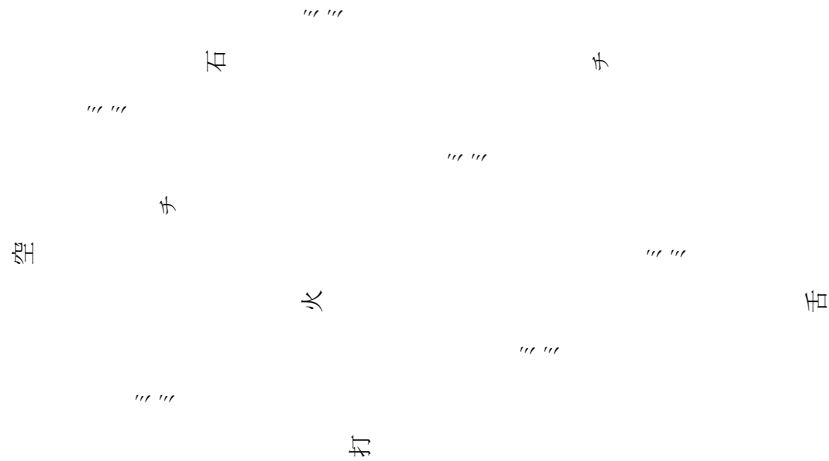
沈黙をおいて

土に頬をつけて とりかえせない

まば、たきを。

わたしたちのありか

話しかけないで ミミ打ちすると一変してしまう  
 どうして みんな じつと怪物を かかえていられるんだろう  
 目の前 “目眩の庭” が “白紙にはじまる”  
 ことばが浮かぶ とたんに わたしは やわらかな空気にこすれ  
 発火する 飛び火が “野のカーテン” をつかまえて  
 “花のない枝” をつかまえて  
 ことばが つぎつぎ ことばをつかまえて  
 でも “目眩の庭” つて なんだろう  
 歩を止めるたび ことばと 風景の 火打ち石が ぶつかって  
 あたりから ピチ、パチ、舌打ち ほらみろ ソラミミ  
 ミミ打ちされる  
 火ノ手ちゃん、跳びあがり 煤煙くん、のびあがり 一行が 靴から燃えあがる  
 “白紙にはじまる” が燃えあがる “花のない枝” が燃えあがる  
 “狂気の林道” が燃えあがる “小鬼のダンス” が燃えあがる  
 あたりまえに わたしはいるのに とほりもなく  
 ことばがでない うーん うーん  
 うーん うーん  
 焦げついた オープンからとりだす 目眩の庭は



光の背骨

ネト

ほ お ？

ト

ほ お

色 の  
な い

ト

光：  
サン

薪

木

響：  
？

光：  
き ん

ね

四 十 雀

林：  
ノ 木

重みで

ほのお

ほ ほ ム

き ん

夢

そのまま そのもの

燻  
ぜ

枝が

すこし

揺れた

ト

そ こ っ こ

イ

そのまま そのもの  
木

刻

のど  
鍵ア  
穴ノ

一

刻

おは  
いり

ふるえ

ふあ朝朝  
しるとが  
身して  
だて

そのまま そのもの

イ

光 (り)

そのまま そのもの

測  
カレ  
ナイ  
写真

たずねて きていて

ト

あ、  
遠い日の廊下

息子の  
自転車

いない

s h h h

本戸

窓

ヒト

実際の編み目のと、あまのひ  
日本国旗に、マツが、いた、た、ま、も、と、い、る

ク  
ス  
ス

ス  
ス  
ト

団  
栗

車  
椅子の娘が